

近代の短編小説

明治篇

現代文学研究会 編
九州大学出版会

近代の短編小説

明治篇

現代文学研究会 編
九州大学出版会

近代の短編小説（明治篇）

1986年10月25日発行

編 者 現 代 文 学 研 究 会

発行者 緒 方 道 彦

発行所 （財）九州大学出版会

〒812 福岡市東区箱崎7-1-146
九州大学構内

電話 092-641-1101 内線6439
092-641-0515（直通）

振替 福岡1-3677

印刷・製本／凸版印刷

©1986 Printed in Japan. ISBN 4-87378-147-7

はしがき

一、明治文学といわれるものの中から、代表的な作家十名をまず選び、それらの作家の代表的な短編ないしは問題作を一篇選び出し、それらを成立年代順に並べて全体を構成している。

一、小篇といえども作品を全体として読解し、小説を論じる態度を培うことを目的に、作品は全文掲載の形で取り上げている。

一、個々の作品に最小限必要と思われる語句注釈をつけ、〔参考〕において作者の書簡や日記から関連のある部分を抄出して掲げるとともに、〔評論〕には作品論の中から定説的なものを中心に紹介して、作品理解に便宜をはかっている。

一、〔解説〕は、作品研究の現状をふまえてそれぞれの担当者が、その作品についてのの見解を述べて、作品理解に広がりをもたせるようにしている。

一、〔参考文献〕は、当該作品についてのものに限定し紹介しており、それでも多数に上る場合には、主題考察に直接関係するものなど、特に主要なものに限っている。

目次

幸田 露伴「一口劍」	石田 忠彦 一
尾崎 紅葉「巴波川」	橋口 晋作 三〇
樋口 一葉「大つごもり」	榎林 滉二 三〇
泉 鏡花「外科室」	秦 行正 七〇
国木田独歩「忘れえぬ人々」	中村 青史 三三
夏目 漱石「倫敦塔」	上出 恵子 二三
田山 花袋「隣室」	宮内 俊介 一四

島崎 藤村「並 木」		水本精一郎 一三
永井 荷風「狐」		瓜生 清 一六
森 鷗外「蛇」		宮崎 隆広 二七

幸田露伴「一口劍」

幸田露伴 こうだろはん

慶応三年七月二十三日、昭和二十二年七月三十日（1867～1947）。本名成行。叫雲老人、蝸牛庵などと

号する。江戸三枚橋横町に父成延、母融の第四子として出生。幸田家は代々表御坊主衆の家系であり、これは露伴の博学にも影響する。東京府第一中学校、東京英学校を経て、明治十七年電信修技学校を卒業。十八年北海道後志国余市に電信技手として赴任、この頃坪内逍遙の影響を受け、小説革新を志す。二十年帰京、父（植村正久の感化を受く）の影響で聖書に接し、また淡島寒月を通じて西鶴を愛読し、「一刹那」などで西鶴文体を模倣する。文壇登場作は『露伴々』（明22・2）であるが、認められたのは「風流仙」（明22・9）においてである。以後、明治、大正、昭和の三代に亘って文学の各ジャンルで活躍し、その膨大な作品群はまさしく一つの文学的宇宙を形成している。その間、文学博士（明44・2）、第一回文化勲章（昭12・4）が授与されている。

おもな作品を列記すると、小説には、「対髑髏」（明23・1）、「一口劍」（23・8）、「いさなとり」（24・5～11）、「五重塔」（24・11～25・3）、連環体小説の「風流微塵蔵」（26・1～28・5）、現代小説の「天うつ浪」（36・9～38・5）、「運命」（大8・4）、「幻談」（昭13・9）、「雪たたき」（14・2）、「連環記」（15・6）などがある。他に、史論「頼朝」（明41・9）、史伝「平将門」（大9・4）、「蒲生氏郷」（14・9）、評論「一国の首都」（明32・11）、随筆「調言」（明34・9）、「長語」（34・10）、注釈「芭蕉七部集評釈」（大9・1～昭22・3）、「新群書類従」の編集などがあり、それに、修養書、考証、考勘、翻訳などもある。また、その知識は釣魚・将棋・写真・中国古典・仏典などと広範囲に及んでいる。全集としては、岩波版『露伴全集』（全44巻・含附録 昭53・5～55・3）がもっとも完備している。

上 篇

元氣よかりし雲雀の声、入り相の鐘に収まりて、春の日の暮れ方しづかに、柳の蔭より段々暗うなりゆけば、頓ては小流れの傍の白鷺躑ばかりを染め抜いて、地の塵は見せぬほどの月の光り柔らかに世界を罩め、霞みわたる鎮守の杉の森、庄屋殿が背戸の竹藪をよりともせで、諸鳥夢にあたゝまる夕べの景色、風流知らぬ男もさも心持好さそうに眺めて唧へ煙管のけぶり長閑なれば、噂は昼休みに一寸摘んで置きし土筆煮て、我が手柄を疲れたる夫の膳に薦めんといそがしい中にも、背面から廻りて踞み居る肩越しに首を出す我子に、これかと乳房を見せて共に笑ふ風情、極楽は此処より遠からじと思はるる田舎に、さりとては村はづれの一軒屋、柱よろけて家根の藁大分黒く、然も去年の冬は何として凌ぎしぞ、あら打ちの壁土あらかた崩れ落ちて、今それより洩るゝ問答の語氣ゆたかならず、癪ばしりたる女の声も蓮葉に、まだ欲しいと云はるゝか、其大きい腹も身の内、大概にせらるゝがよし、わたしの足はもう酔つたれば厭なりいやなり、歩行くは厭なり、それに錢でも持つて行くことか、何時も払ひをわるくして置いて借りに来るのに向ふは商売でも碌な顔せず、先刻もたつた二合ばかりと、三合と云ひたいところを弱身あれば此方から遠慮して出たるに、あの伴頭め、酢を嘗めたやうなむづかしい容貌をして、此三十日は確かに勘定すまして下さる当がござるか、三月

〔參考〕「七月五日 民友社に送るべきもの書かではと筆を取り憤発して原稿を書き初む」『七月十二日 一口剣を漸く終ふ。十日の夜脱稿はせしが清書にかゝりて百枚以上にもなるべく見えしかば驚きて削減にかゝりて（中略）漸く昨夜より清書にかゝりて三十七枚に書きちゝむ』（『地獄溪日記』明23・6・7）のち『城南評論』（25・6）に掲載。

「お蘭といふ女は雛形を取つてかいたのだが、彼作を書く時分には、あんなやうな詰らん者であつたが、今は余程えらい者になつてゐる（中略）實際は鍛冶屋の女房であつたといふ訳ぢや決してない」（『自作の由来』明30・8『新著月刊』）初出は「露伴氏が『風流仏』『一口剣』『五重塔』等の由来及び之れに關せる逸話」。

（1） 現行の表記法に従えば、会話文を示す「」をつけるべきところ。句読点も現行とは異なる。

（2） 番頭。

も前の分がまだ其儘になつて居る始末⁽³⁾、しかと御請け合ひなさらずば上げ憎うござると、鹿爪らしい切り口状、此のはげあたまめ、人の運は一寸さきも知れぬものを行く末を見た風な云ひ草、あてがござるか無いかとは能く能くさげすんだ言葉を産湯にあび、藁筵^{わらじ}の上で這ひ這ひ稽古して育つたおのれら土百姓に見くびらるべき罪はもたず、齒齏^{しう}一ぱいの口をして小癪なこと云ふなど一本やり込めてやりたかつた所なりしが、さうしては今夜飲めずと、虫を杉の香に殺し、くやしいのを耐^{こら}へ、無理に御世辞笑ひをあんな奴に振りかけて遣つて、ほんに先月はお氣の毒な事しました、実は地金の廉いのを余分に買ひ込みましたため、お払ひ申すことが出来なくなりましてまことにどうも、其代り今度は鋤鍬や鎌など色々と注文を受けて居りますれば、間違ひなく先づのも一どきに御勘定いたしませうと、仕事も無いに真赤な嘘を一寸こしらへて甘く欺^{うそ}して来た仕誼^{しぎ}なれば、又行くのはわたしは厭なり、飲みたくば御自身で白鳥⁽⁵⁾さげてお出でなされ、あまり氣の利いたものではなし、わたしはもう沢山、ナニ、おれはまだ酔はぬとお云ひのか、成程半分の余はわたしは飲んで仕舞ひました、それで悪いのならば、あやまつて、ア、眠たし、おわび申して寝ませう、夜は短し、愚図々々せずつと殿様もおやすみなされ、フ、ゑゑ、まだ何を五月蠅^{うるさ}く小言云はるか、親切な人ならわたしに裏の清水一杯汲んで持て来て、酔ひ覚めの甘露をすゝめるほどの事は働きの無い腕で

(3) 事の次第。

〔評論〕

「主人公正蔵のモデルは露伴の直話によると、講談にある赤穂の義僕直助であるといふ。則ち後の名刀工津田越前守直助である。直助は初め赤穂の義士小野寺十内(或は岡島八十右衛門)の奴であつたが、主人の佩刀のことから奸人に恥辱をうけたのに憤を發して刀工となり、数年の間に新刀正宗の名を博するまでになつた」(柳田泉『幸田露伴』昭22)。

(4) 仕儀。事のなりゆき。

(5) 白鳥徳利(とっくり)。くびが長くて白鳥に似ているところからいふ。

も成りそうなものな、何処の国に男が酒飲ましてと女房をせがむことのあるものぞ、オヤ御叱りでは恐れ入ります、お叱りは恐ろしい事、イエどう致して、殿様を馬鹿になどは致しませぬ、まことに能く才覚のお廻りなさる、智慧のお有りなさる、貧乏にはおなりなさらぬ、奥方の衣類櫛簪を質にはおいれさせなさらぬ結構な殿様をどういたして馬鹿になどには少しも致しませぬ、昨日此頃の様に苦しからぬ世をわたり、將軍さまの御鬢を吹く風が通ふ江戸の町で大きなつたわたしが、かゝる草深き片里の酒屋の奉公人などに易く取扱はれぬも皆殿様のお蔭なれば、中々ありがたく思ふて居ります、と見事に饒舌つて退て、がち／＼と炉ぶちをはたき、何の詰つてある煙管の腸ぞ、鈍なものが、役たゝずと抛り出せば、今までおとなしかりし亭主の声少し太く、酒買ひに行くが厭ならいやでよし、我に突きかゝつて来るには及ばず、恨みがましい文句は云はば互にあり、我もおのれ故にはもう一年で天晴れ師匠様より許しを受け立派な刀鍛工になるべかりしに、ついした事よりおのれに引かれて、あの武蔵守正光殿に輔の初中終の吹き様から教へて戴きし大恩を余所にし、共に逃亡して故郷へ帰つたれば、一徹な親父様の承知なされず、師匠の家の敷居内へ足蹈みのならぬやうな事して来たもの、我家の鴨居の下はくゞらせじ、其女と別れて武蔵の守殿に詫び叶ふたらば兎も角、左なくば勘当と云はれし其時、おのれも覚えて居やうが、おのれの涙ぐんだ眼と我眼と見合せてふびんさ堪らず、勿体なかつたが親父様に背を見せ二人

(6) 正光は、橘氏武蔵江戸法城寺派の刀匠であるが、天和年間の人なので、正蔵のモデルを赤穂の義僕とすると元禄年間のことであり、やゝ時代にずれがでる。未詳。

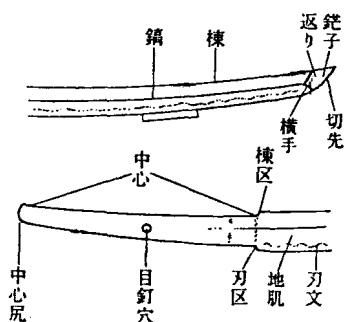
(7) 鍛冶心得五ヶ条のうちに「火を選ぶ事尤清きを用ゆべし」とあり、その火は竈「送風機」の加減による。

手を引き合つて、それから此所に落ち着いたものの好い仕事はなし、口惜しけれど農具鍛工となりさがつて此通り、おのれが叔母の家を出る折、渡つてきたと云ふた金も衣類も皆無くなつたのがおのれは腹立ちなら、師匠様親父様に逢ふ事ならぬのが我はなさけなし、ア、もう今夜は酒は飲むとも甘くもあるまじ、愚痴は五分々々、云ふも詮なき業はやめて我も寝るべしと、妻に怒りし言葉の末もろく遂には独り言をしほに立ち上りて、みづから戸締りせんと、貧すれば是も不如意の兩戸がぢく／＼引き寄せしが、帰りさまにいぎたなく臥したる女を見て思はず睨め付しや、おのれめに迷ふて、と口の内につぶやきける。

されど情ばかりで義の無い出来合ひの夫婦中、濃いだけ互に許せし勝手より、いさくさが⁽⁸⁾出て一悶着、済んでは又も情ばかり残るか、お蘭、お蘭とやさしう呼びて、寝びえするなと何やら掛けてやる様子、其時女房いきなり飛び起きて、閉めし戸を瓦落り明けしまゝ、駆け出す姿しどけなく、衣裾ほらほら脛白し。

少時して片手に徳利さげながら片手に褌とつて、小草の露の珠を踏み分け、惜気もなくおぼろ月に美しき面を見せつゝ戻り来しお蘭、我家を一寸覗いて後、足を清めて静かに上り、ぼんやり考へ居たる男と爐をはさみて坐りぬ。酒あたゝまるを待つ間長くと、此は啞、彼は盲目の中淋しかりしが、頓て鉄瓶より小壺引き

〔参考〕 刀劍の名称。



(8) こいさ。

抽き一盃飲んで見て、お蘭其猪口^{ぶちぐち}を直に男の手に載せ、サアお燭も丁度よし、心よくあがつて下され、先刻のいさくさはわたしに負けましたれば、あの元頭^{はげたま}を骨折つて口説き落し漸くこれだけ又取つて来ましたを、ホ、ホ、ほめてやつて、堪忍して下され、あやまりますに、機嫌直して笑ふて仕舞ふて下され、まあお重ね、と折れて出て、惚れた女が侑^すむるにたわいなく、受けて、遣つて、貰つて、又差して、強ひて重ねさせて、すけてやつて、双方酔ふてゆつたりして、見れば女房が水髪^⑨の少しく乱れたるも可愛らしく、亭主がでつぶり肥え居て、しかも常から愛嬌ある顔の、眼の中いき／＼と涼やかな今、ひとしほ憎からず。

夫婦互に睦ましく語らへば、妙なもの哉、心やはらぎたる女の声次第に細く、男は却つて興に乗ずる故か氣も大きく声も高くなり、くらしを苦にするお蘭の話しを打ち消して、ハ、ハ、と奥底なく笑ひ、天井の一番遠き隅へ酔^{よめ}を吹きかけつゝ、其様にく／＼せずとも居れ、思ふ同志かうして暮せば、下物は塩^⑩からき香の物ばかりでも我は嬉し、さきのやうにそなたに怒られさへせねば貧乏も左程^{さほど}に悲しからず、蒲団は無くとも十布の菅蓆^{すがど}、きみをな／＼にわね三布にと、江戸を出る前そなたも元氣よく、陸奥^{むつ}の果てへなと連れて退いて下され、憂さもつらさも厭ひませぬ、と小歌まじりに我に云ふたではないか、と女の頬をちよいと突く、其指先を捕へて痛くはないほど囁んで突つばなし、およしなされ、わるさなさるゝな、そんな手であどけなく悦びしは浮氣で逢つた昔、可笑しくもなし、女

(9) 油を用いず、水だけで撫でつけた髪。

(10) カブツ。酒を嚙みくださしむる物の意。

(11) 編み目が十筋もある幅の広い菅蓆。古歌「みちのくの十編の菅蓆七編には君をしながら三編に我寝ん」による。男の側に女が添い寝することにする。次の行の「陸奥の果て」はここから導かれている。

(12) 近世の俗謡小曲の総称であるがここでは江戸小唄（江戸端唄からでた三味線唄）か。

房なればこそ心配して世帯じみた野暮な話しも酔に出て来て為るものを、と尻目づかひに力を入れてツンとしながら睨めば、男は頭掻き掻き、さう云はれては面目なし、縁とは云へ夫婦になつてから亭主のくせに帯ひとすぢ買つて遣ふこともならず、実は能く愛想をつかさずに居て呉れるが若しや見限られはせまいかと此太い腹の中でひや／＼することも間々あるが、我とて一生かうでもあるまじ、又よい運の芽が萌えて。サア其運の芽の萌ゆるが此儘では些覺束なけれど、何ぞ樂しみにするのがあるか、と推されて男は少し行きづまりしが、ハ、ハ、ハ、と笑つて、マア飲みやれ、と猪口をわたし丁寧に注いでやり、扱昂然と身を反らし、別に變つた目当もなけれど、かう見えても此の正蔵は當時天下に第一と云はるゝ武蔵守正光殿が教を受け、かたじけなくも天の麻比止都禰の命の流れを汲んで、腕は十二の春より鍛ひ、四方詰め、三枚張り、二枚ばり、いづれも会得し、つかね、上わかし、伸べ鏢かしの呼吸を心得、陰陽大事の焼刃渡し、甚深秘密の湯加減まで確と骨髓に刻み付けて忘れず、棒劍、五分ぞり、八分反りの次第より、ひら作り、菖蒲づくり、冠り落しの色々まで由に覚えて、短劍長劍作るに成らずといふ事なし、かくあさましく零落れながら高慢すると思ふか知らねど、恐らく日本六十余州の刀鍛工、見渡した処我が上に立たせべきものも無し、道にたづさはりし先後こそあれ我が朋輩弟子を我眼にて扱み取りにして相槌となし、一心こめて打つて上ぐるならば師匠が作にも劣らざるのみかは、虎徹繁慶をもさ

(13) 『日本書紀』(神代紀)に「天目一箇神為作金者」(アマノマヒトツノカミをカナダクミと爲し)とある。鍛工の奉じた神。

(14) いずれも鉄の鍛錬法。

(15) 鏢はシャク、金屬を溶かすこと。一般に、沸かすと表記する。いずれも鉄の溶かし方。

(16) 鋼を鍛えて、刃(ヤイバ)ヤキバとなすとき、陰(乱焼)陽(直焼)の二法がある。

(17) 焼を入れる時に使う水の加減(水を以て成就す是を湯かげんといふ)。

(18) いずれも刀の反り加減。

(19) いずれも刀身のうち方で、横手の筋、鎗のなひのがひら作り、切先に横手の筋のないのが菖蒲づくり、棟のところから束の部分を急に細くしたのを冠落し(鵜作)という。

(20) 「凡一尺七寸九分までを中脇指といふべし。一尺八寸より九寸五分迄を大脇指とす。二尺より以上を刀といふ也。(中略)二尺六寸より以上(中略)は太刀或は長刀といふべし」(新刃銘尽)。

(21) 虎徹 名は典異、越前の生れ、はじめ金沢で甲冑工、のち近江で刀工、江戸に移り大成。寛文・貞享の人。繁慶(シゲヨシとも)、本名野田善四郎、

／＼凌ぎて天晴れ末代に伝はるべき宝剣をも成し得べしとは日頃此胸の中に蟠わだかま
れり、されど悲しきは世にまことの眼をもてる武士は少く、正宗(22)といへば鑑下(23)の
腐りたるをも千両に買ふものあれど、名もなき鍛工の作といへば五十年の生命を
僅か二尺たらずに縮めて鍛ひ成したる利刀にも、五匁の銀を惜むが常なり、然し
われ此腕に覚えあれば何日かは名をあげ家を起す時来るべしといふに、つく／＼
聞き惚れ居たりし女房満面に笑みを含みて、名もあがり家も富まば何程嬉しから
うぞ、其時わたしを我儘者として捨て玉ふな、忘れもせぬ去年の春、私が迷ふたが
無理だつたか、ゑゝ此の憎い男め、とお蘭がさす猪口を正蔵手ごと握りて、何の
捨てゝ好いものか此の我儘者をと、あとはひつそりして、ゆる／＼わたり来る遠
寺の鐘の音低き軒を繞り、眠そうなお月さま桔槔はねつるべのあがれる端に憩ひ玉ふ。

中 篇

むく／＼と肥りて大きな白狗しろぬを供になし、銀ぐさり御自慢の淀屋橋(24)が二ツ提
げを腰にぶらつかせて、両手を後面うしろに組んだまゝ、正蔵殿能く精が出ます、と声
かけて、のそりと入り来る五十以上の爺を、お蘭見るより亭主の返答を横から奪
つて、うすべりの塵埃じんみをはたき、マア旦那様、是へおいでなされ、其処は火が飛
びます、火いちりの仕事場はまことに危なうござりまして、サアお構ひなくずつ
とこちらへ御通りなすつて、と下には置かず口早に饒舌しゃべれば、ハア姉御の世辞は

三河の人、はじめ鉄砲鍛(清亮と名のる)のち職府で刀工。慶長・寛永の人。江戸名工の双璧。

(22) 正宗という刀工は十人を超すが、普通は、鍛冶中興の祖神と仰がれる岡崎五郎入道のこと、またはその作の刀のことをいう。相模鎌倉に生没。その間諸國を廻遊、文永・康永の人。
(23) 刀劍の刃と棟区(ムネマチ)にかけて刀身が抜けないように締めておく金具を鑑という。

(24) 大阪の豪商淀屋が珍重したものをいい、ここでは漆で紋などをつけた革細工製品。

甘いものでござる、どうしても江戸の衆は違ひます、村一番の愛想よしだと若い者達がほめるが、実は其の無理でない、と無遠慮な評はしながらも、向ふ鎚の小僧が横を過ぎて茶の間に上つてから、女房が汲んで出す麦湯(25)を戴いて飲むさま、流石庄屋の礼儀正し。

其間に亭主ちゆうしゆ爐前ろまへを立ち手を洗つて来り、丁寧ていねいに時候の挨拶すれば、唯はいく／＼と受け応へばかりして、さて膝の上に指の股ひろげて載せ居たりし手を少し後へ引き、言葉をあらため、今日わざ／＼まゐつたは外でもなし、実は其の、此村の鍛工を同道して明日御城下の御家老様の御宅まで来いとお知らせが来たなれば、実は何事かと魂消たまげたが、実は其の、おたがひに実は悪党ではなし、実は又、あしき事にはあらざれば当人もろとも安堵してまかり越せとの、実は有り難い事故、実はさつぱり訳が分らぬが、実は其の、正藏殿、万一そなた兇状持ちでもあるなら、実は大変なれど、そなたはまこと、実は善人で、実は其の、少し不了見で、実は其の近所の娘とねんごろし合つて欠落かぢちして来たといふだけの事とおもつて居るが、実は肥り過ぎて腹は布袋ふくのやうだがあまり色男のそなた、実は又、ほかに不義密通でもありはせまいかと疑ひもしたるが、それがあらはれたにしては御家老の所へ呼び寄せられるが変なり、実は又、今の殿様は結構な有り難い殿様で、下々の事をどういふものか詳しく御存知で、孝子貞女などは此村でばかりも三人呼び出されて青緋あざしを賜(26)はつた位なれば、そなたも何か良い事のあるではない

(25) 麦茶。

(26) 紺色に染めた麻縄の錢糶、またはそれに通した錢をいう。普通はわら縄であるが、公儀からの賞賜の場合に特に用いられた。

かともおもへど、実は其の、親に勘当を受けて居る孝子もなし、又そなたの女房は他人に向へば東し風でそなたには西風だといふ噂なれば、実は、姉御耳をつぶして居て下され、実は其の、たしかに御ほめにあづかるほどの貞女でもあらずと考へられるが、兎も角も明日は我等と共に城下に行くべし、他へ出ることはなりませぬぞ、仔細分るまでは我等も、実は其の、心配でならねど、御上の御用は謹みてする我等故、実は其の、知らせに來たり、実は其の、実は其の、エ、実は其の、用は是れだけなりし、さらば明朝、と云ひ捨て一礼し、犬に送られ導かれて帰りに行くしろ影、小僧は見送りて指さしながら、ハ、ハ、ハ、あの附け鬘が日に光る、ハ、ハ、あの附け鬘が。

藁葺屋根に音もせて降る春の雨も枝に知られて一ト際しなへる山吹の花折々は水に点頭くを、障子明け放して身を行書の定のやうにたわいなく柱へ憑れながら眺め遣りつゝ、あゝ、あれも小本読み(27)倦きた眼を移して我が庭の隅に咲き居しを見付け出せしときのはうが奇麗なりし、其の頃は苦勞といふは身だしなみばかり、湯で逢つてさへ近所の同じ歳恰好の娘たちに、お蘭さまのおぐしのいつも御見事なとほめられしほどなりしが、今はそれが鏡へも向はずぐと束ねて、差し櫛もすき透るものはたゞ一枚も持たず、じめ／＼する此天氣に湿気たる着物

(27) 小形の本をいうが、ここでは洒落本の異称。

(28) べっこうの飾り櫛。

一枚とは何といふまじや、叔母さまの云ふ事きいて表具師の所へ嫁入りせしな
らばかうはなるまじきに、其男めの濡れ紙のやうにしなくなしたるを虫が嫌ひ、
一つにはつい馴れせめし今の人の大やうなるが骨に浸みて可愛らしく、後先も見
ず雲をあてに逃げてからは悲しい目ばかり、それもよけれど一緒に暮らして見れ
ば大やうが大やう過ぎて心の働きが鈍い殿様、ほんにどうして此やうな野呂間^{のちま}に
惚れて叔母様に余計な苦勞かけたかと、自分で自分の昔しが悔しい時は、思はず
髪をむしつて悪口を壁にたゝきつけるほどの日もあれど、それでも怒らず大やう
にやさしく扱はれては又急にむら／＼と可愛くなつて、我血を吸はれ我肉を剝^そが
るゝとも此人には惜しからずとおもふ夜もあり、それかとおもへば何事か云はれ
し時など忽ち厭になつて、癩に障つて、訳もなく腹が立つて、我の眼の前に其人
の覚えて居るのが忌々しく、我が眼をつぶして仕舞ふか其人を灰にして仕舞ふ
か、どちらかにして仕舞ひたき様な心持する折節は、我罪を責むるのか其人を恨
むのかも分らずに苦しくてたまらず、其中いつも癩^{かさね}が起つて足元より寒風ぞつぞ
と立ち、胸は暫時に厚氷りに閉ぢつめられて、動^{どう}と倒れて黒闇の底なし井戸に身
を逆しまに落ち入るやうな切なさ、しつかりせよと云はれ漸く心附^{こづ}てほんやり其
人の顔を見る時は、ア、前の世の敵同士でゐる事かと氣味の悪い事比^{たと}へ難き
癩のあと、今考へ出しても厭なり、好いた男と共に住みて貧乏するのみか此のく
るしみ、是れも若しや添ひ遂げられぬ行く末のしるしかとおもひまはせば、悪縁